



虎嶋安貞記一夕話
初篇

桐野利秋

國幹妻

合本堂



10

15

20

25

A 424

西鄉隆盛之書

幽居夢覺起茶煙靈境
溫泉洗世緣地古山深
靜於夜不聞人聲耳
只看天

閑居偶成 南洲隆盛

48-7916

鹿兒島實記城山之戰

陸軍卿山縣君



年信魚

茲以明治

十年九月

二十有四日賊將

西鄉隆盛桐野利秋以下二百有余人

鹿兒島縣下城山岩崎谷に戦死を

次へ

原已片



攻撃手兵と云ふ
 小分ち隊へ進
 一隊へ困むべし
 一攻撃兵一人
 弾薬二百発
 必負へしめ
 賊塁を兼取
 近し其他
 必渡すべし
 必苦戦

☒ 合田兵より銃戦は賊を走り去らざるべし攻撃手兵の事
 情よりて應援と乞ふも軍團の号令にあらざれば
 援ふるす一指令長官の合圍線の中央に出張
 一指令と成て一攻城砲隊
 指令長官大山少将の其砲
 隊を以て之を助け其の攻
 撃を先浄光明
 寺山は備へる大砲を
 以て城山の東北より
 賊塁を破壊すべし

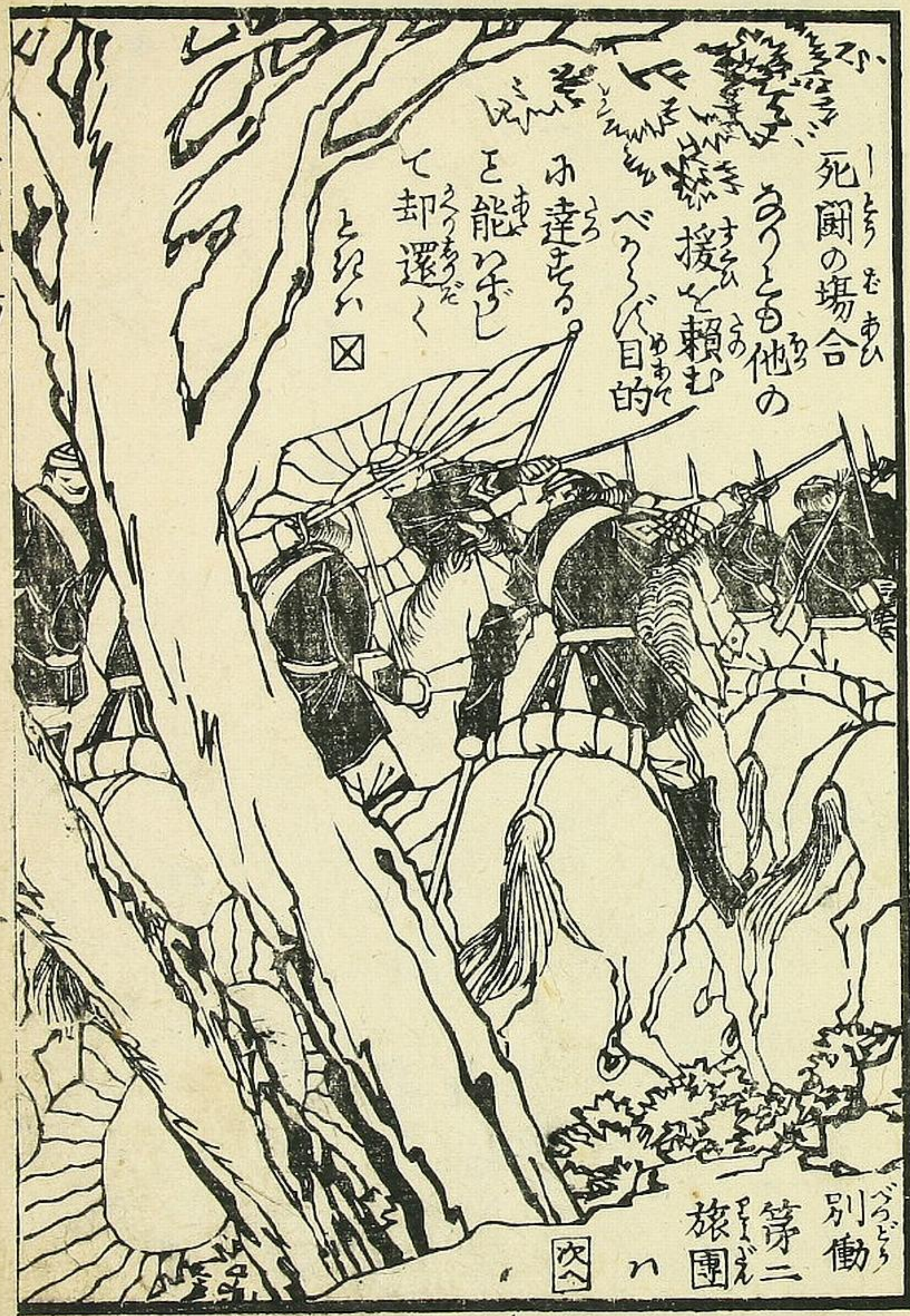
○第一第二
 旅團



死闘の場合
 あつとも他の
 援を頼む
 べうべ目的
 小達する
 と能わす
 て却還く
 とぬい

別働
 第二
 旅團

☒



城山の東北より進撃

あるまじ

熊本

鎮其堂及
別働第一旅團の池
の新集院より進ん



○その
部署と
約束
を定め

廿四日の午前

第四時を

期として

四面より進

撃手のみ

各旅團の

城山の中央を奪ふ。第四

旅團新撰旅團の城山

の前面より向ひ進

乱発は山腹

樹林の間

より進ん

て賊の

要害

と取

攻撃

攻撃

○

斯の如く官軍のあはれ

部署左のど

立約

攻撃兵八廿三日
の夜半より

ひそかに合圍

線を出

夜ふ

まが

と

城山の

麓

ある

適宜

の次へ

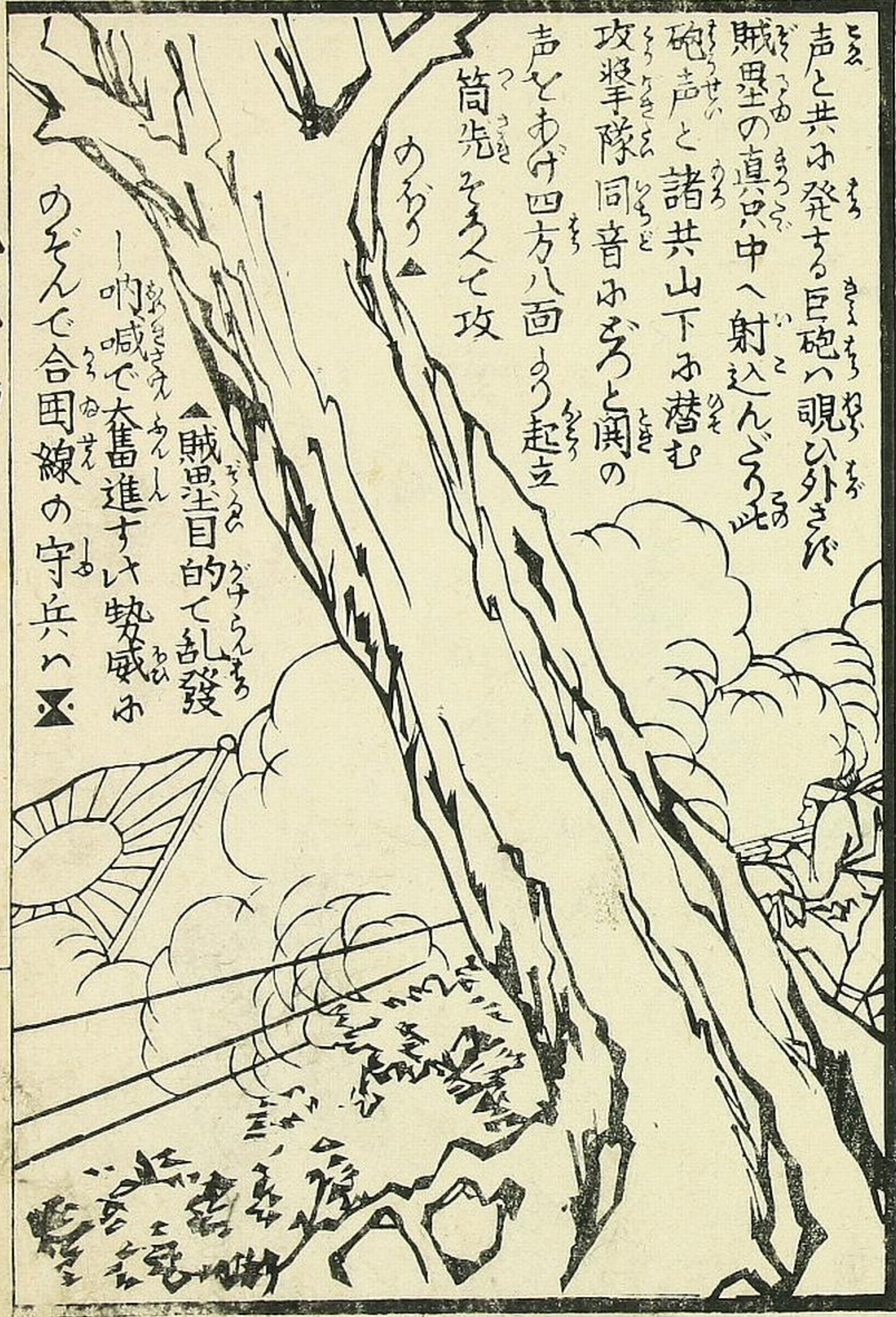
場所小池上四郎



光明寺
 山砲発の
 合図とぞ持
 程よ
 大山少将の我陣堂
 立のり士官ふを号令
 已砲臺の拒里と定め
 既全隊備りたまは時刻の
 めと令旗と指揮一喝叫ぶ

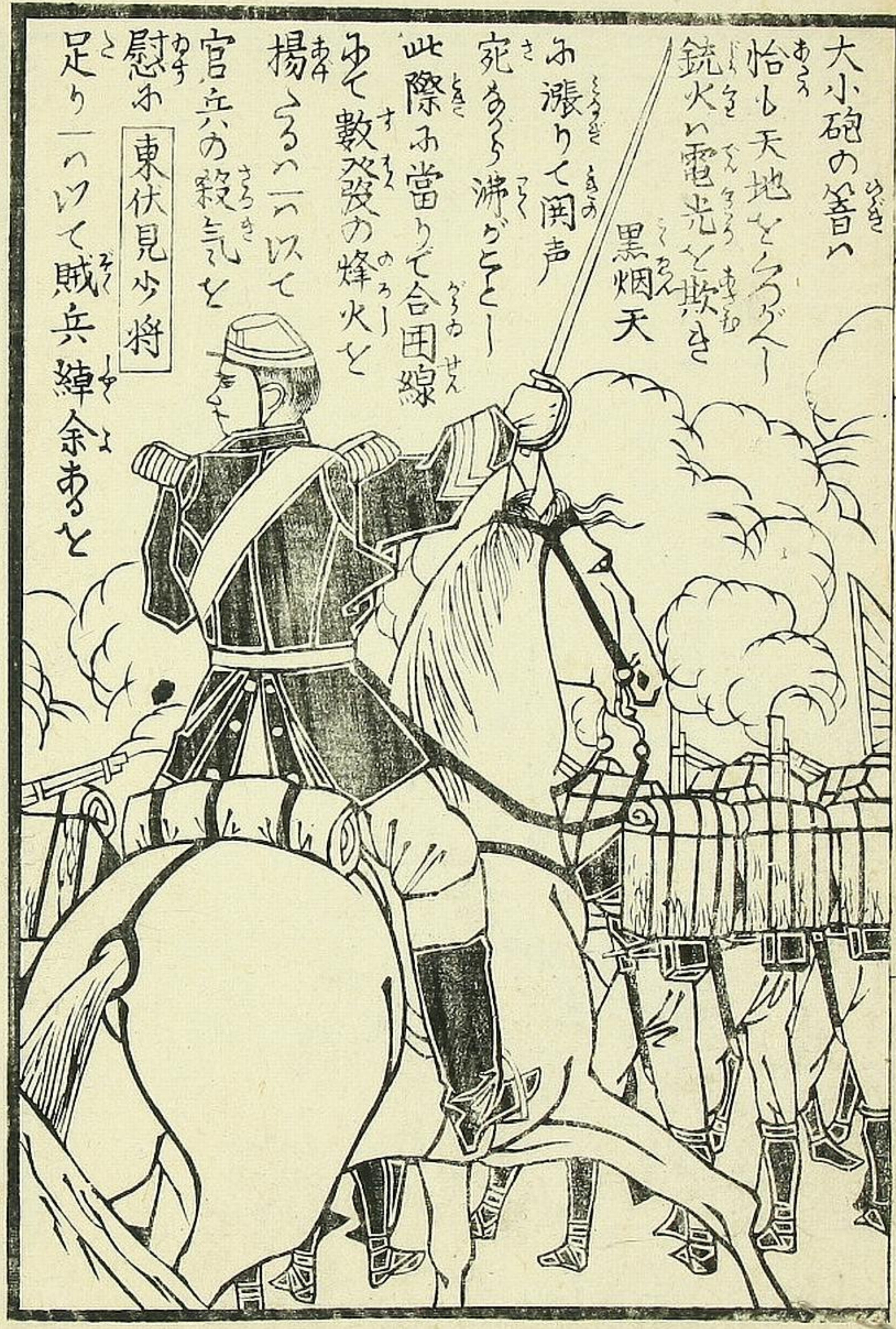
五万口一齊小鯨波と
 あげ或の喇叭と吹

立て
 攻げ
 兵
 其声山岳も
 小吉援す
 くらと計あり

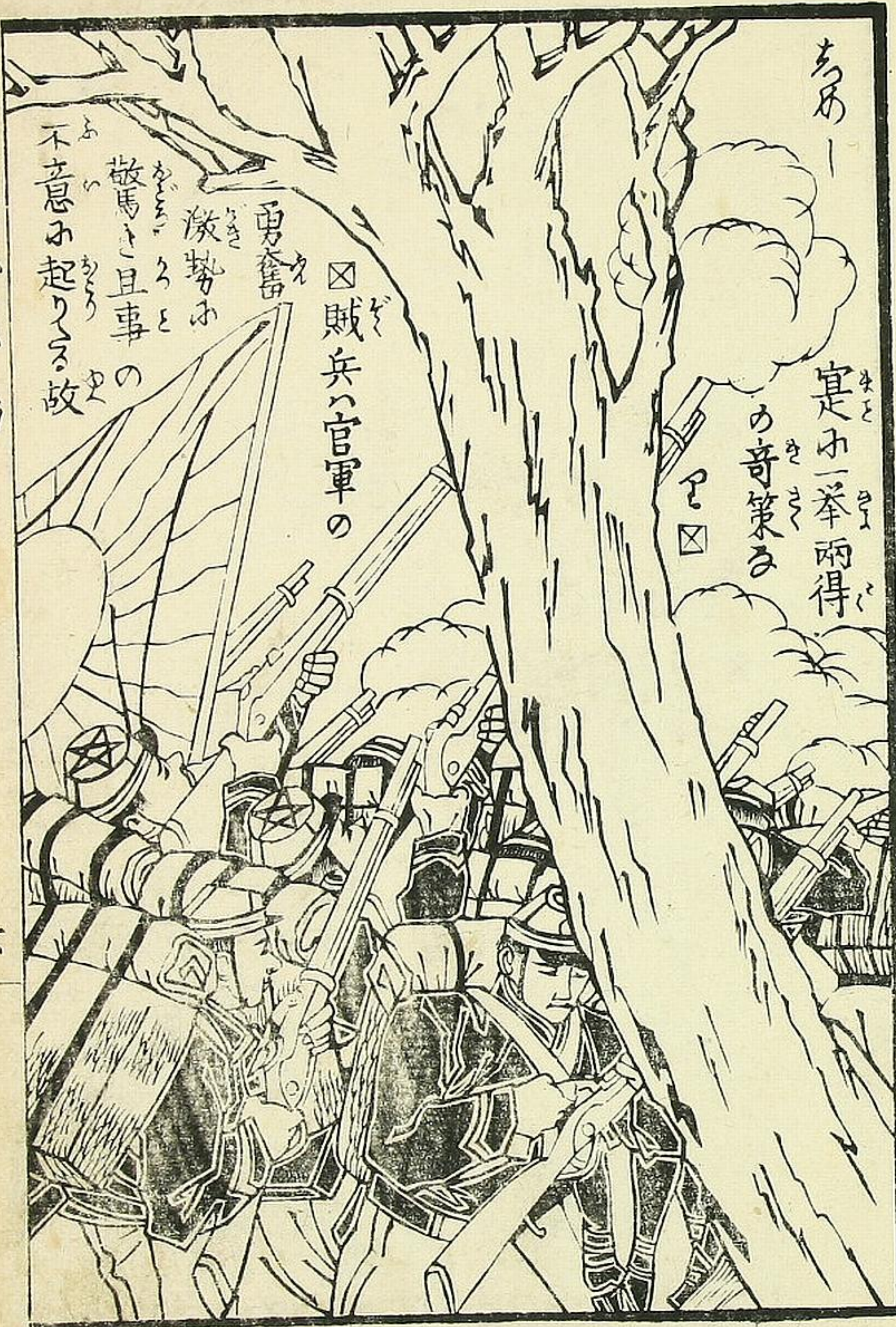


声と共に発する巨砲の覗ひ外き
 賊軍の真只中へ射込んごり此
 砲声と諸共山下ふ替む
 攻撃隊同音ふごりと関の
 声とあけ四方八面より起立
 筒先をよみて攻
 のあり

賊軍目的て乱發
 一吶喊で奮進すは勢威小
 のぞんで合圍線の守兵ハ

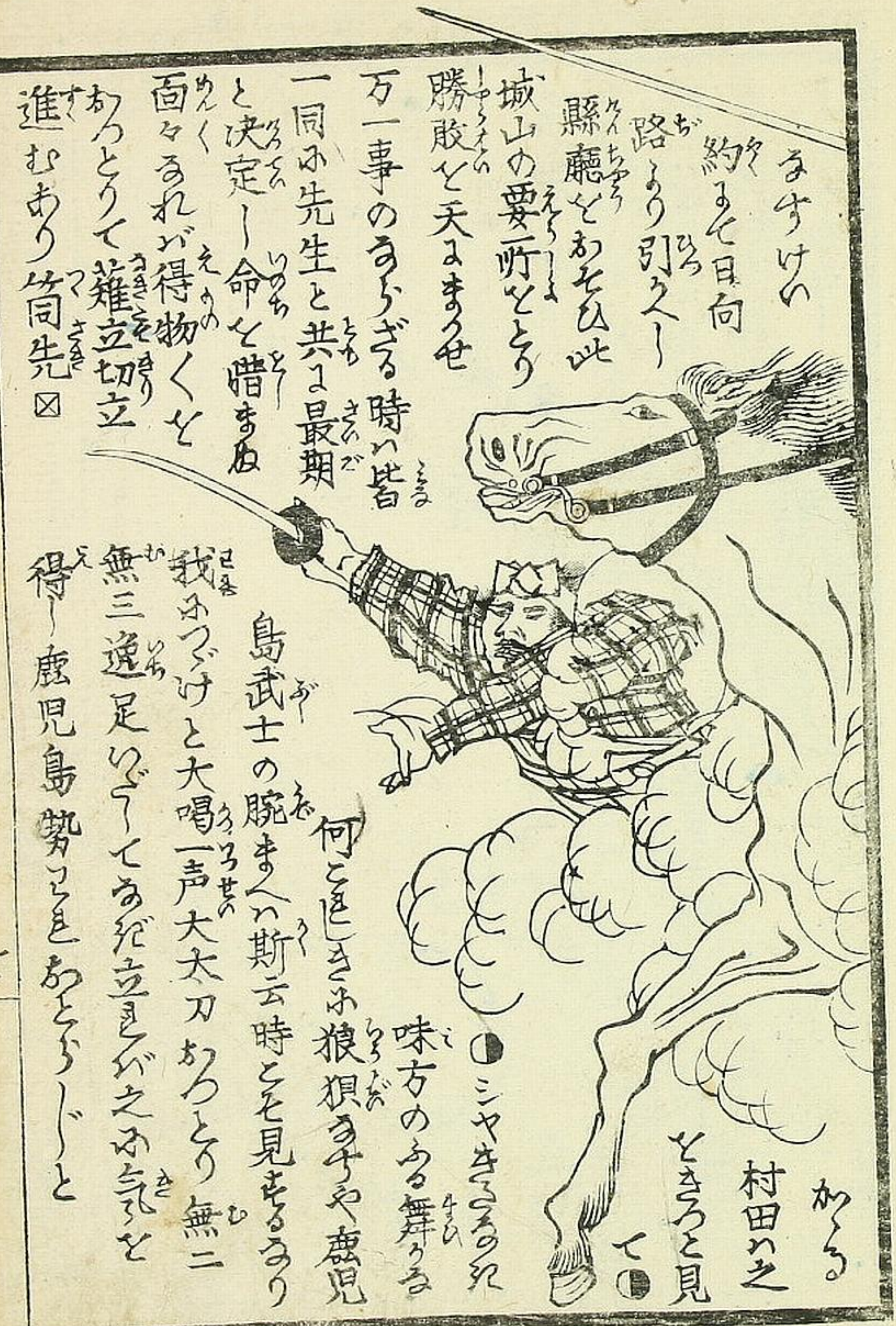
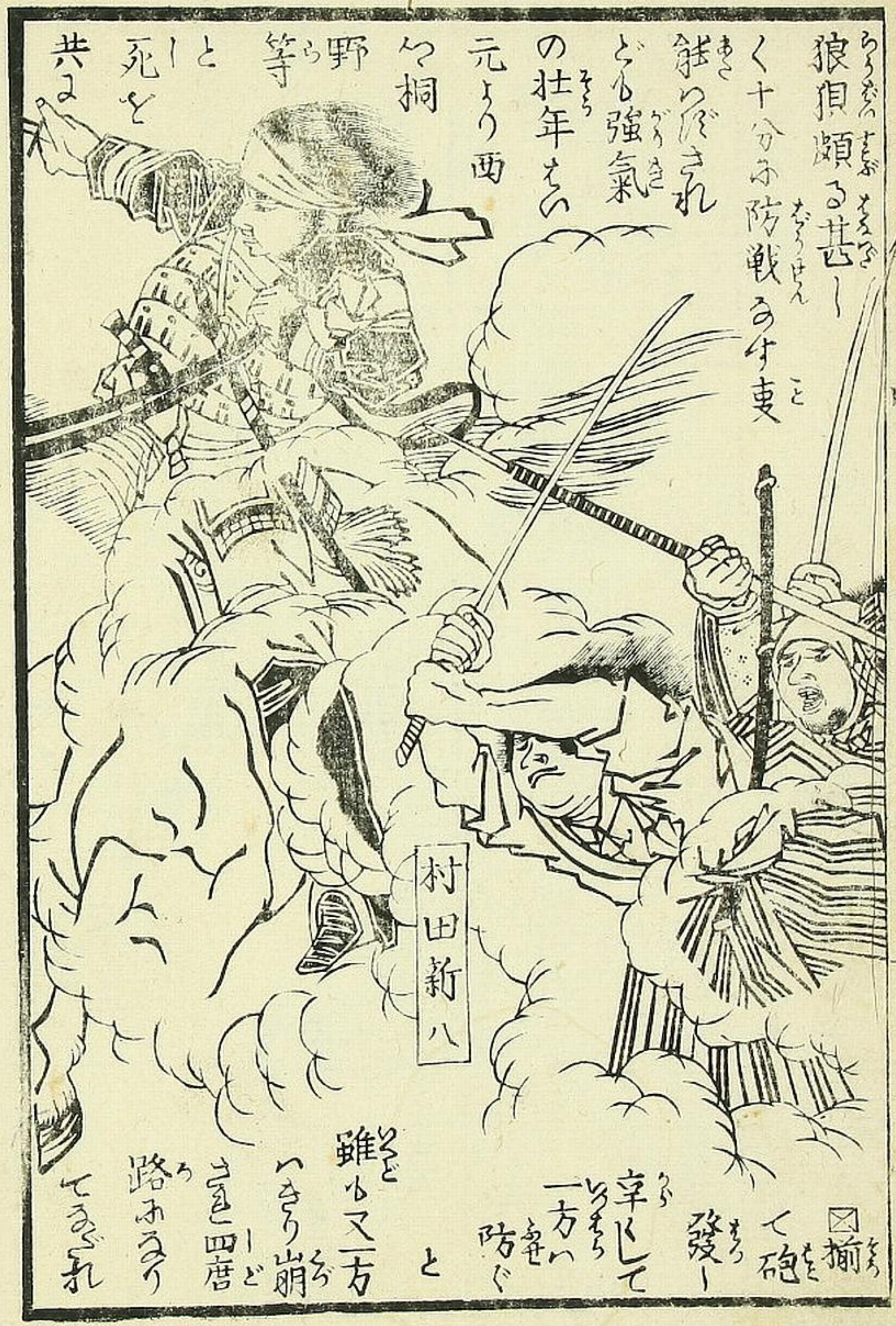


大小砲の音ハ
 怡も天地をうらぐ
 銃火の電光を欺き
 黒烟天
 ふ漲りて閑声
 宛あつら沸ぐとこ
 此際ふ當りて合圍線
 めて數發の烽火と
 揚ぐるへて
 官兵の殺氣と
 慰ふ 東伏見少將
 足り一いつて賊兵縛余あると

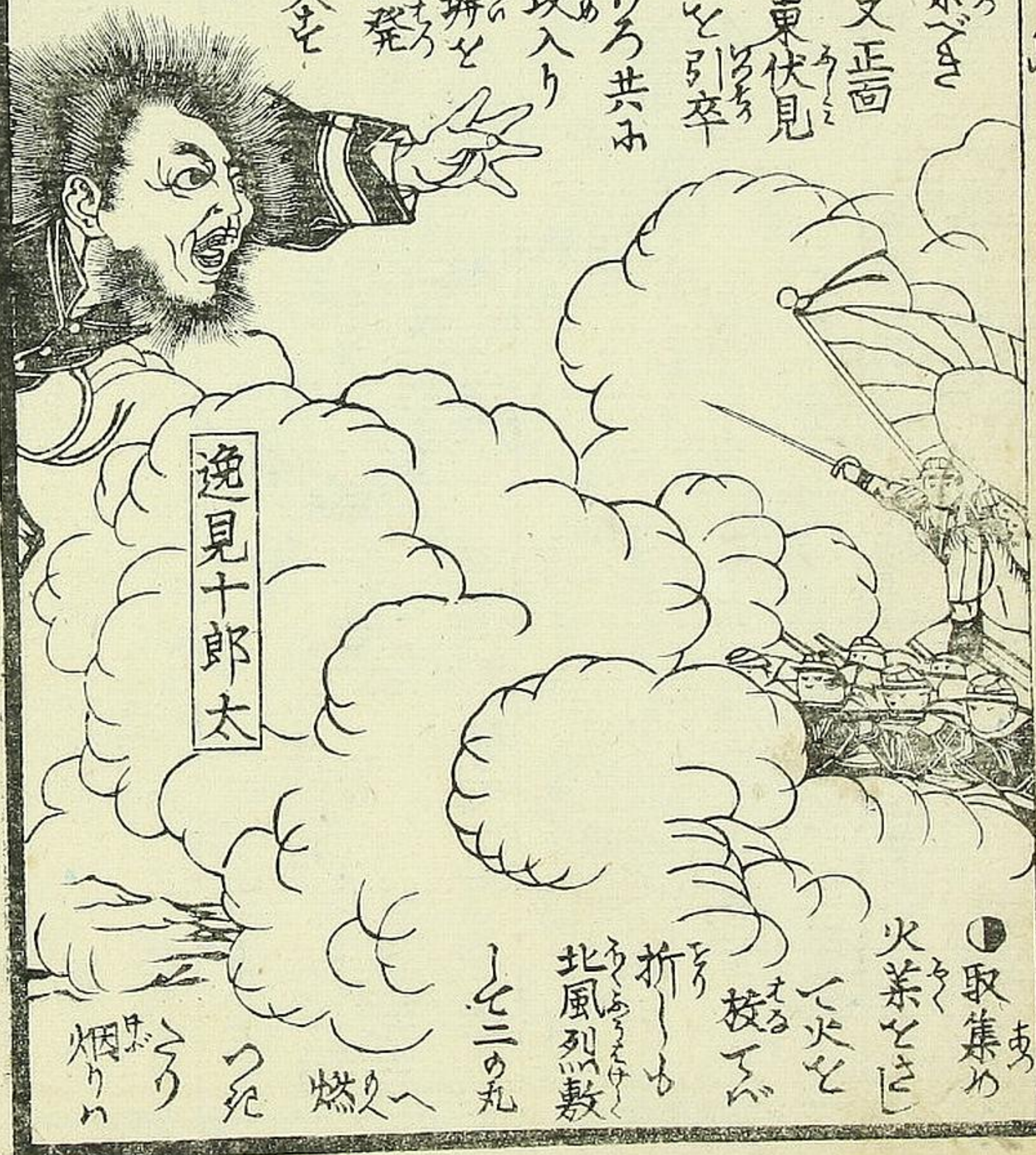


ちあー
 寔に二拳兩得
 の奇策
 勇奮
 激勢
 敬馬且事の
 不意ふ起る故
 賊兵の官軍の

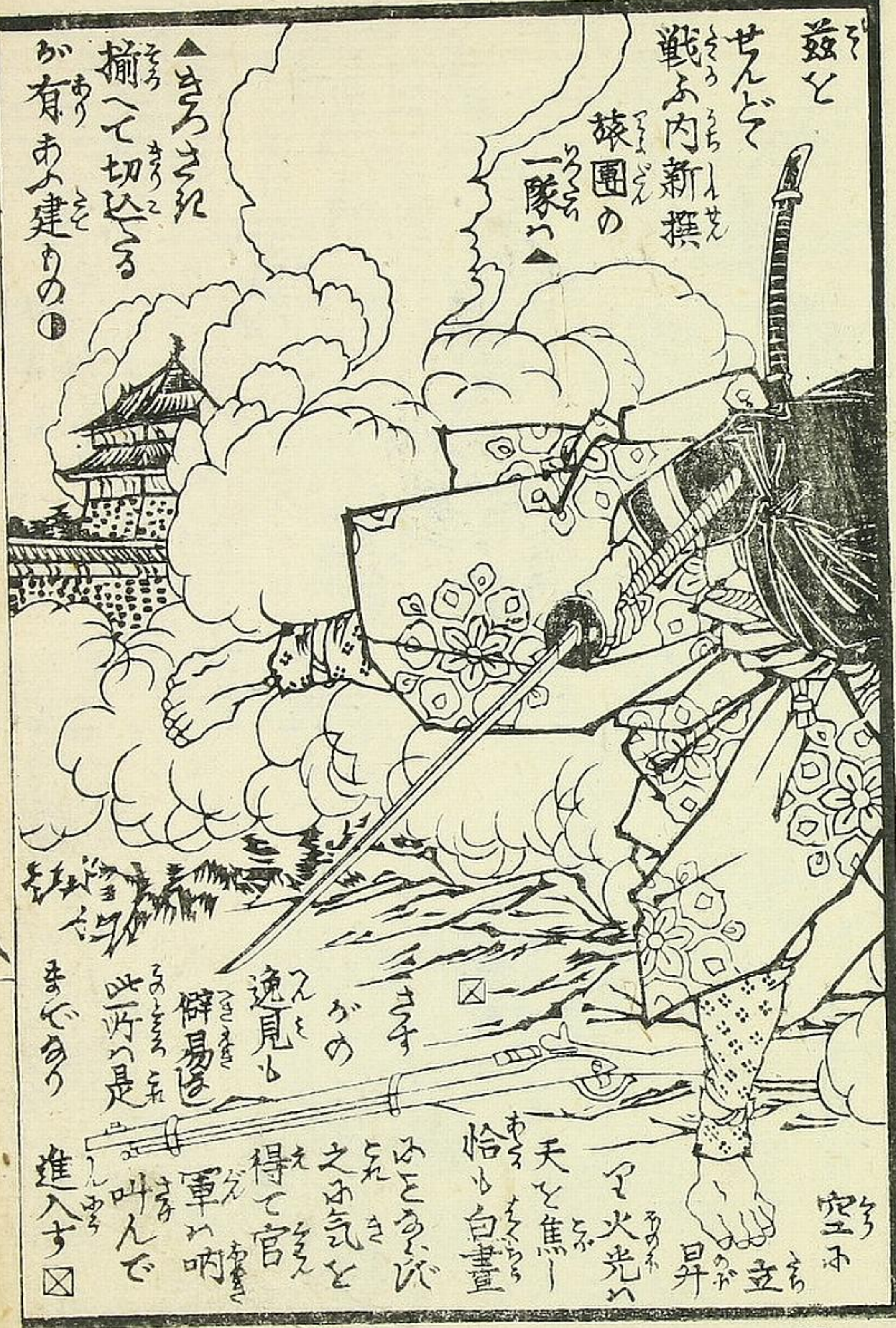
尾目鳥



防撃は何時果て
 と見えざる又正
 よう攻撃はる東伏見
 の宮へ新撰旅團を引卒
 は第四旅團とあり共
 私学校二の丸攻入り
 階梯をうけて高城を
 のり越小銃を乱発
 ば呐喊して進軍を
 賊將逸見十郎
 太へ生徒おまか
 しく号令あり



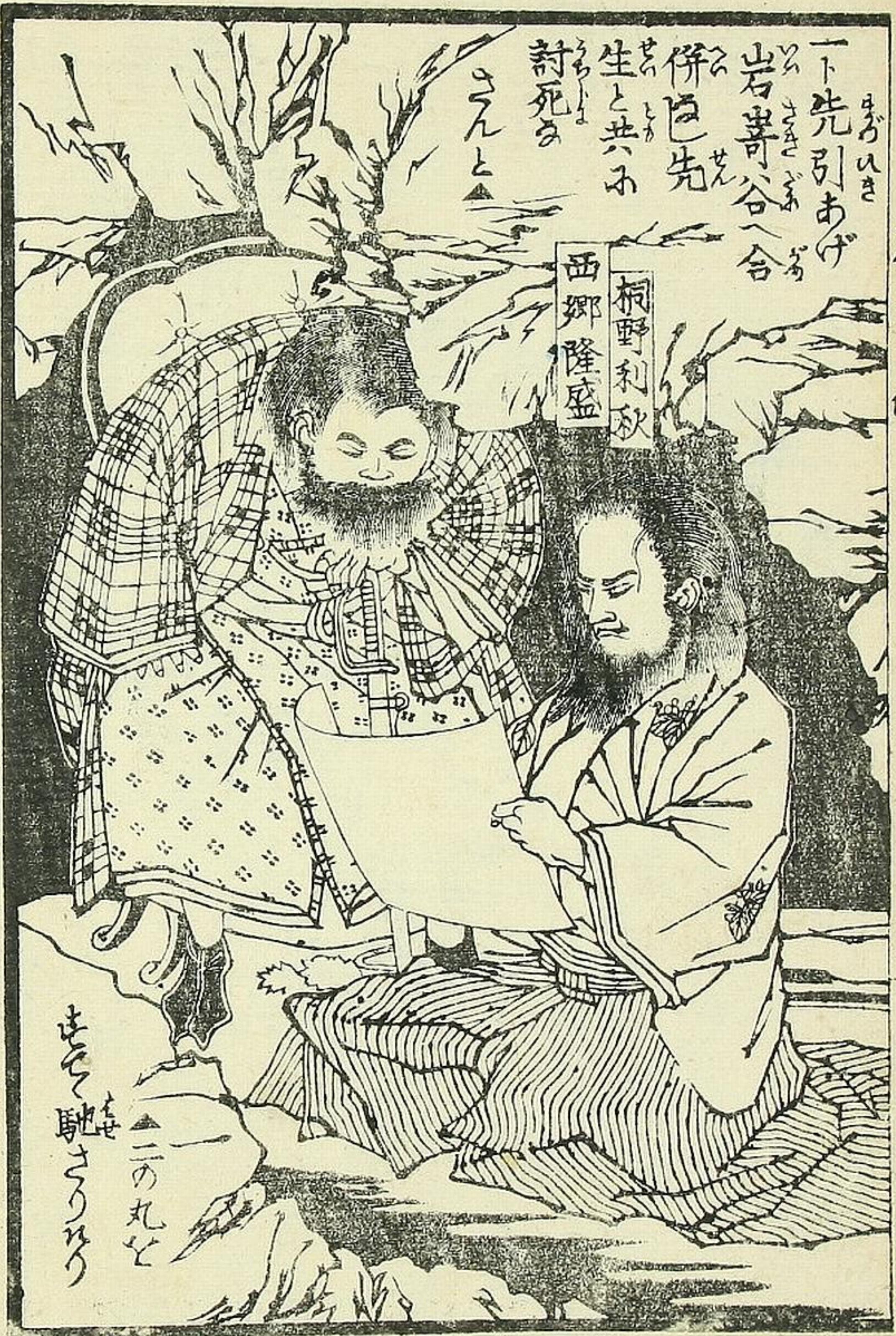
●取集め
 火薬をば
 て火を
 枝を
 折しも
 北風烈敷
 一七二の丸
 燃へ
 つ死
 煙りの



茲と
 せんど
 戦ふ内新撰
 旅團の
 一隊へ
 ▲さるさる
 揃へて切込る
 ありあり建りの

空の
 立
 昇
 火光の
 天を焦し
 恰も白晝
 ひとあは
 之の氣を
 得て官
 軍の
 叫んで
 進入す

屋山



下先引あけ
岩寄谷合
併色先
生と共小
討死
さんと

桐野利秋
西郷隆盛

はるく
二の丸と
馳せりなり

東京繁栄大圖八色入

開明東京新圖銅鑄

開明皇國新圖日

小学教授書數種

錦絃畫帖るる

文人画圖卷るる

新大系種画志るる

日本地誌畧輕多箱入

日本史畧輕多日

小學單語輕多日

和英對譯輕多日

近世英雄輕多日

泰語録教數種

千代紙るる

雄弁州子教志るる

東京第一區六小區

日本橋通壹丁目十九番地

分

和漢書籍
東錦繪

問屋

大倉孫兵衛

010190507985

